コミセンホールにかかる大きな絵をご存じですか？
渋谷定輔　生誕 120 年

鶴瀬コミュニティセンターホールエントランスに入ると、正面にかかる絵「この風の音を聞かないか」をご覧になれます。渋谷定輔・黎子夫妻を描いた大作です。今月号では富士見市上南畑に生まれ、今年生誕120年を迎える渋谷定輔について、ご紹介します。

この風の音を聞かないか

絵の上部は青を基調とした南畑の農村風景を背に、渋谷黎子（定輔の妻）が左手に詩集『野良に叫ぶ』を持ち、佇んでいます。中央左に描かれた茂る葉に埋もれて見える顔は、黎子が敬慕したローザ・ルクセンブルクでしょうか。下部にはベレー帽に眼鏡をかけた渋谷が本を読んでいる姿が描かれます。

阿伊染徳美氏により描かれ、昭和61年（１９８６年）に富士見市に寄贈されました。タイトルは、黎子没後一周忌（１９３５年）にまとめられた追悼集原稿をもとに発行された『この風の音を聞かないか』（１９７８年刊）によると推察されます。

F150号（縦1818㎜×横2273㎜）の大きな絵
作・寄贈：阿伊染徳美（鶴瀬公民館蔵）

渋谷定輔（１９０５―１９８９）とは

渋谷定輔は、明治38年（１９０５年）富士見市上南畑の自作兼小作農家の長男に生まれました。厳しい農作業に従事する中から生まれた詩集『野良に叫ぶ』を21歳で発刊。同じ時期、今からちょうど１００年前１９２５年５月から１９２６年12月まで、南畑の農家の暮らしと、渋谷の青春の日々を日記に綴ります。その日記をもとに昭和45年（１９７０年）『農民哀史』を刊行、昭和61年（１９８６年）には自らの生涯を話し言葉で振り返った岩波新書『農民哀史から六十年』を発刊します。

渋谷は、戦前は農民運動、戦後は様々な社会・文化活動を続け、富士見市では市民大学講師を務めるなど、市民との交流を深めました。

第1回地域・自治シンポジウム（当時：教育・福祉・保健・地域を考えるシンポジウム）で講師を務める渋谷（1986年）（富士見市立中央図書館提供）

富士見市立図書館　渋谷定輔文庫

渋谷定輔文庫

渋谷定輔文庫は、渋谷から一括寄贈された約5万点（図書・雑誌・新聞・文書・写真・遺品など）を収蔵しています。これらは、渋谷の多岐にわたった活動から所蔵された資料群です。

図書館の公園側の一角には渋谷定輔文庫コーナーが設けられ、著作、関係図書、写真パネル、またその時々のテーマに沿って各種資料が展示されています。資料はネットで検索できますが、プリントされた目録類も置かれ、利用票に記入して閲覧することができます。

資料のほとんどは閉架書庫に収められ、害虫駆除、殺菌のために順次燻蒸し大切に保存されています。

渋谷定輔生誕１２０年にあたり、図書館では児童書コーナー脇の大きな柱から始まり、柱ごとに渋谷のイラストが入った番号（１～）をたどると、『野良に叫ぶ』からの詩が掲示されています。

渋谷定輔文庫の閲覧スペース

図書館員作のはんこイラスト

東中学校との交流

昭和54年（１９７９年）の東風祭では、渋谷も参加した南畑小作争議を題材とした創作劇「荒くれた手」が一年生により上演され、最優秀賞に選ばれました。

さらに昭和60年（１９８５年）、松形恭知先生と村山博子先生、富士見市在住の版画家小口益一氏の指導により、『野良に叫ぶ』の詩を題材とした版画が制作されました。これらの版画は、『農民哀史から六十年』各章の扉に掲載されています。

また版画の一部は、渋谷文庫で保存されています。

東中学校生徒の版画作品
（富士見市立中央図書館提供の写真より）

取材を終えて

・プチブルを捨て、渋谷黎子として駆け抜けた愛と革命の日々。文通から始まった純愛の歴史が胸に迫りました。

・南畑出身ですが、渋谷文庫は１００年前の南畑の暮らしを知るきっかけとなりました。

・東中の生徒さんが共同で制作した大きな版画の現物は、圧巻でした。

・二酸化炭素による消火設備を備えた書庫で、約十二年かかり整理された貴重な資料は、大切に保存されていました。

・整理された資料が入る箱が棚にきちんと並び、図書、遺品などが収められた書庫。その資料の多さに驚きました。

（編集委員一同）

渋谷文庫所蔵の版画作品と編集委員。作品の大きさに驚きました。

児童書コーナー脇の柱。図書館内を巡り、渋谷の生涯に思いを馳せてみませんか。

公民館だよりを読んでのご感想やご意見をお寄せください。電話・ＦＡＸ・窓口で受け付けています。